親鸞仏教センター通信

2014.
March
第48号

2014年3月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0023　東京都文京区向丘1-13-7
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp

我より深いもの

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

親鸞が語る「われら」は、凡夫としての衆生である。凡夫とは「ただびと」ということなのだが、その平凡さは「無明煩悩われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむこころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」（『真宗聖典』545頁、東本願寺出版部）と言われる。四六時中、自他を汚すような心理を起こして、止まることがないのだ、と言う。

そういう我、すなわち凡夫たる我は、そういう自分自身を悩み苦しんで生きる身でもある。我が、自分に起こる心理に振り回されて、自分自身を失っているのである。そういう我を、虚仮（こけ）不実だと教える言葉があり、その言葉の前に本当にそのとおりだ、情けない、悲しい、と頭を垂れる自己がある。

この煩悩に振り回されて虚仮不実なる我を「自我」と名づけ、そのことをそのとおりだと聞き取る我を「自己」と名づけてみよう。この自己を自我から解放しようとする意欲が立ち上がるのを、仏教は発菩提心（ほつぼだいしん）と言うのであろう。仏陀は、この「自己」こそ衆生の真の主体であると見て、これに呼びかけ、真の主体を回復する方向を教えてきたのではないか。発菩提心とは、真の主体が「自己」を回復しようとする尊い意欲なのである、と。

ところが、ことはそう簡単ではない。「臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」（同）と語られる我らの煩悩は、自我を主人公として、生命が続く限り決してその座を明け渡そうとはしない。煩悩の心理が〈いのち〉それ自身のような顔をして、真実の「自己」が表に出ることを妨げ続けているのである。

この真の「自己回復」の意欲を、一切衆生の存在回復の物語として呼びかけるのが、『無量寿経』の法蔵菩薩の発願修行の説話なのではないか。凡夫に真実の信心が発起するために、先の言葉で言うなら、真の自己回復のために、兆載永劫（ちょうさいようごう）の修行をくぐらざるをえないと、その困難さを語る。法蔵菩薩は、「自我」を生きている凡夫に、「自己」こそ真の主体なのだと納得させるために、地下水脈が乾いた大地の樹木を育成するように、見えざる苦労を持続するというのである。

法蔵願心と阿弥陀の正覚とは、因果で語られている。阿弥陀の名告（なの）りは、地中に深く修行し続ける法蔵願心と表裏している。因果は同時であり、表裏も同時である。それは、我ら凡夫において「自我」と「自己」とが表裏して存続することと別ではない。自我は消えることはないが、自己を自覚して法蔵願心の静かな意欲に、信頼して生きることを、本願の信心と言うのではないか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」㉘

聞法は終わらない

親鸞仏教センター所長　本 多 弘 之

本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」の第66回～68回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、「重誓偈」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、第66回から一部を紹介する。　（嘱託研究員　越部良一）

本願のわからなさ

本願については、本願というのがあるのだと何となくわからないと、親鸞聖人の教えにしろ浄土の教えにしろ、何を言っているのかよくわからない話になるわけです。「本願って何ですか」と質問されると困ってしまう。本願という話をするために私は何年もかかっているわけですから、そう簡単に答えられないのです。質問する側は好奇心か何かで聞くのでしょうけれど、好奇心で聞かれて答えられるような内容ではないのです。

人間が生きて悩んで苦しんでいる。なぜ苦しんでいるのか、というようなことから始まって、それを解きほぐすにはどういのちを考えたらよいのか、どのように自分を考え直したらよいのか、そのような仏教の根本問題と関係しながら、本当にいのちを回復させようという大きな願いがこの仏道のなかで聞き当てられてきて、本願という言葉で伝えられてきた。だから本願というものがどこかにあるのではなくて、人がそれによって歩まされ、それを求めて出遇うことで喜びを感ずるような何か大きなもの、それを本願という言葉で書きとどめてきたわけです。そのような言葉のなかで、この本願の教えを聞くことによって新しいいのちの意味をいただいた方々が本願に帰する、自分は本願に命を捧げますというかたちで伝えてきたものです。だから辞書に書いてあるような言葉で、「はい、わかりました」というわけにはいかない。本願を説明して、本願とは阿弥陀如来が建てたもの、などと書いたって、何のことかさっぱりわからない。

『無量寿経』という経典も、その本願を衆生に呼びかけるために生み出されてきた経典と言ってもよいわけで、本願が何かわからなかったら、『無量寿経』を読みなさい、と言うしかないわけです。しかし、それを読んでわかるかと言ったら、わからない。経の宗致が本願である、経の体（たい）は名号であると。なおさらわからない。名号って何ですか。『無量寿経』の体だと。『無量寿経』というのは名号で、名号を教えるためにいろいろな言葉になっている。その一番大事なところが本願なのだと。本願は名号を教えるための願いが語られている。その本願がわからなければ、名号がわからないわけです。

こういうわけで仏教は難しい。もうちょっと易しく説いてくれと。でも、そう easygoing にすぐわかるようなものは、だいたい偽物です。そう簡単にはわからないのです。命が短いのだから早く教えてくれと言うのだけれど、まあ、最後はしようがない、念仏しなさいと。念仏したら仏さまがたすけてくださるから、それを信じなさいと。そういうわけですが、そう簡単に信じられないから、こうやってやっかいなこと

を言うのです。人間はなまじ理性があるものだから、疑う煩悩をもっている。「疑い」とは根本煩悩です。人間は理性をもっているから神さまに似て賢いのだなどと、とんでもない話です。賢いようだけれど煩悩なのです。その疑いの煩悩を晴らすのは容易ではない。疑いといっても、理性ですら見えないような疑い。つまり、いのちを疑っている。本当のいのちとは何かがわからないで生きている。そのことが実は真実の如来の教えに対する疑いになっているわけです。

そういうわけで、本願の言葉は、解説して済むというようなわけではないのです。

入門はある、卒業はない

『無量寿経』の教えも、一切衆生がたすかるために「南無阿弥陀仏」一つでよいと簡(えら)んだ。だから単純明快に「南無阿弥陀仏」だけでよいと言うのですけれど、南無阿弥陀仏だけでよいと本当に頷くには、言葉の約束ごと、言葉で語っている内容、そういうことをある程度聞いて、ああ、そういうことだったのだとうなずいていかないと、南無阿弥陀仏がありがたいということにならないわけです。一つでよいのだけれども、その一つが一つとしてわかるためにはたくさんのことが必要になるから、これがまたやっかいなのです。一つでよい、他が要らないというのは、散々聞いた結果そうなるのです。だから、梯子(はしご)で屋根に登って、屋根に登るのが目的だったら梯子を外してよいというようなものですけれど、梯子がなかったら下に降りられない。梯子があって下に降りないと、次に梯子を登る人に登り方を教えることもできません。

そういうわけで、教えの言葉とは、辛抱強く、そのように尋ねて、そのようにうなずいていった歴史があって、それを聞き当てられるまで聞いていくという仕事が、あとから行くものの仕事になるのです。なかなかこれは容易なことではない。長年聞いたらわかるというものでもない。何かこれは、その人その人の機縁なのです。機縁が熟すれば、言わんとすることの本質をすぐ見抜く方もある。いくら聞いても、やはり疑いの濃い人は受け入れない。出遇いも機縁です。誰に出遇うか、どういう言葉に出遇うか、それはまったくわからない。だから、どれだけ聞いたからわかるというものでもないのですけれども、納得できるまでは聞かなければならない。それを聞法というのです。

曽我量深先生があるとき、「この仏法は入門はある、しかし卒業はないのだ」とおっしゃった。それはどういうことかと言うと、人間は愚かである、どこまでいっても迷いが深い。そこに苦悩を突き破ったものに触れよという願いがはたらき続けるから、そのはたらきに触れ続けるところに喜びがある。卒業する喜びはなくてもよいのです。聞法は終わらないでよい。ニコニコしながら、「死ぬまで聞法、死ぬまで聞法」と言ってきてくださっている方がありましたけれど、死ぬまで聞法です。そういう覚悟ができればよいわけです。早くに終わらせたいなどと思うから、もうちょっと易しく話してくれと、そういうことを言うわけです。早く終わらなくてもよい。それは一回でも喜びがあればそれでもよいと言えるけれど、苦悩の命に終わりはありませんから、また聞いて、また聞いていく。そういうことが、法蔵菩薩に触れるということなのだろうと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、公開（無料）で開催しています。

記

日　時：2014年3月　6日㈭午後6時30分～9時
4月　休　会
5月23日㈮午後6時30分～9時

場　所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典(せいてん)』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189　FAX 075-371-9211
https://books.higashihonganji.or.jp

現代と親鸞の研究会・第45回

西洋の近代と日本の近代

哲学者　長谷川　宏

長谷川宏 氏

2013年12月11日、ステーションコンファレンス池袋（豊島区）において、哲学者であり、また子どもの学習塾「赤門塾」を開いておられる長谷川宏氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。現代日本社会に生きるわれわれにとって、西洋における近代という時代はどのような意味をもっているのか。長く西洋近代の思考に親しみ、同時に現代日本の子どもたちと深くかかわってこられた氏の発題の一部を、以下、簡単に紹介する。（研究員　内記　洸）

古代ギリシャと近代

ヘーゲルは、近代という時代に生きるただなかで近代というものと非常に深くかかわった哲学者です。例えばフランス革命が起きたとき、彼は17、8歳という青年期をすごしており、近代という時代を代表する出来事を身近なこととして経験しています。また、時代に対する関心が非常に強かった人ですから、近代というものを何とか明らかにしようとした彼の考えのなかには、時代の本質を突いているものがたくさんあります。

ヘーゲルの頭のなかにはいつも、「古代ギリシャと近代」という大きな問題区分があります。彼にとって古代ポリス社会は共同体と個とが一体化した一つの理想的な社会だったのですが、それ以降、近代にいたるまでの歴史の過程で人類が積み重ねてきたもののなかに、克服すべき問題を克服し、過去の共同体を超えていくような歴史の論理があるのではないかと彼は考えるのです。

古代ギリシャでは数々の英雄が登場しますが、彼らはその共同体において模範的な生き方をした人々、社会が求める価値を体現した人々です。つまりそこにおいて理想的な個人とは、共同体精神を体現した人物を指していたわけです。それに対して近代は、そういった徳とか社会の価値を体現するだけでは済まないような人間が登場する時代です。古代ギリシャにおいては、例えばソクラテスという人が近代人のいわば祖型であるとヘーゲルはとらえますが、これはつまり、いろいろな共同体的な価値を超えて自分自身の信念をこそ価値あるものとして主張する人間です。ソクラテスの裁判が典型的に示しているように、ポリス社会において共同体と個人というものは簡単には折り合いがつかなくなっていきます。こうした人物の登場によって近代という時代が本格化するとヘーゲルは考えたのです。

近代的個と社会

近代という時代の出発点はデカルトのコギト、つまり、自分が考える、それによって自分が存在するという考え方です。「我思う、ゆえに我あり」というのは、自分自身のなかに何とか自分が生きていくための根拠をもとうとする考え方です。近代という時代においては、この自分を中心にする考え方が非常に強く主張されるようになります。これは、個人が自分の思考を元にして善悪・正邪をふくめたいろいろな事柄を判断し、自分の生き方を貫いていくといった生き方が価値あるものと認められる時代に入ってきたということです。

個とはつまり、それによって近代が新しい社会として成り立つことができる、一番の核になるような存在です。ただし、個々の人間が自由に自立して生き、自分で自分を決定するということになったときに、それで社会がうまくいくかというと、そうは簡単にいかない。さまざまな矛盾が噴出してくる。かと言って、そこに登

場してきた個人という存在を消せるかといったらそれはもう不可能でしょう。むしろヘーゲルは、個としての人間がどうやって新たな秩序を創りだしていくかということが近代の最大の課題だと考えるのです。

ちょうど18世紀から19世紀にかけての時代にヘーゲルがぶつかり、思い悩んだこの大問題と同じ問題を、現代でもなお私たちは抱えています。どのようにして、個が自由であると同時にある種の共同体の秩序を保つことができるのかという問題は、簡単に解決できる話ではありません。一方では個としてどう豊かに生きるかという個人の問題があり、もう一方ではどのように共同性を作り上げるかという問題があり、私たちにはこの二つの問題がいつも同時に迫ってきています。社会の仕組みやそこに大きく広がる価値観といったものは、自分のなかに何らかのかたちで繰り込んで考えていかなければなりません。それが近代が構造としてもっている、大きな問題なのです。

日本の近代化と、今に残る思想的課題

日本という国に関しては、外からやってくるものをどのようにしてうまく自分のものにしていくかということが、民族としての基本的な心の動きであるような気がします。「学ぶ」という言葉の語源は「まねぶ」、つまりまねることだと言われていますが、日本人は昔から外国を必死でまねし、その思想・文化を何とか自分のものにすることで歴史を歩んできました。その点は近代化の過程においても同じです。日本の近代化は、大きく言って物質面と制度面ではそれなりに成功してきましたが、精神面についてはこれがなかなか難しかったのです。

そもそも、近代精神というものがまねすることをよしとしない精神です。にもかかわらず当時の日本では、西洋の文化を追い付かなければいけないものとして、自分たちよりはるかに上にあるものとして見るような心の持ち方が要求されましたし、しかもなるべく早く効率的に、国全体が一丸となってやっていかなければなりませんでした。滅私奉公や自己犠牲といった言葉に表れているように、場合によっては自分のうちに判断基準をもたないことが強く要求されます。日本の近代化はとても厄介なかたちの、お手本のある近代化として進めていかざるをえなかったのです。

西洋近代の思想という、いまや世界全体に大きく広がるかのような思想に対して、もっと具体的な問題もかかわってきます。例えば、西洋のいろいろな制度やものの考え方をお手本にしようとするとき、自分たちの足元の暮らしのなかにあるそれなりに輝くもの、優れたものを、西洋中心の近代思想とどのように区別していくかといった問題があります。とはいえ、お互いの人格を尊重して対等に話をしたり、自分の生き方を自分で選んだり、あるいは人間に対して基本的な信頼感をもつといったことは、近代という時代を経て大きく現れてきた生き方です。こういった点で、近代の価値はそう簡単に低められるようなものではなくて、やはり、私たちにとっては大きな意味のあることだったのではないかと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

※長谷川宏氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第29号（2014年12月１日号）に掲載予定です。

長谷川　宏（はせがわ　ひろし）哲学者
1940年島根県生まれ。1968年東京大学大学院哲学科博士課程修了。学園紛争を経験したことにより、一切大学には就職所属せず、自宅で学習塾を開くかたわら、哲学研究者として、原書でヘーゲルを読む会を主宰。
近著に、『高校生のための哲学入門』（ちくま新書）、『いまこそ読みたい哲学の名著　自分を変える思索のたのしみ』（光文社文庫）、『格闘する理性―ヘーゲル・ニーチェ・キルケゴール』（洋泉社 MC 新書）、『ことばをめぐる哲学の冒険』（毎日新聞社）、『生活を哲学する（双書　哲学塾）』（岩波書店）、『ちいさな哲学』（春風社）、『経済学・哲学草稿』（光文社古典新訳文庫）、『初期マルクスを読む』（岩波書店）、『ことばへの道　言語意識の存在論』（講談社学術文庫）など多数。
共著に『芸術の体系』（光文社古典新訳文庫）、『思索の淵にて―詩と哲学のデュオ』（近代出版）、『魂のみなもとへ―詩と哲学のデュオ』（朝日文庫）、『キリスト教の精神とその運命』（白水クラシックス）など。
また、親鸞仏教センター情報誌『añjali』第16号に「若者の生きづらさについて」を寄稿いただいている。

「現代と親鸞の研究会」（於：「ステーションコンファレンス池袋」）

にいたるのだ、というのです。阿弥陀の願いがこの身に開かれるのです。

（訳：親鸞仏教センター）

原文

また言わく、「**其仏本願力　聞名欲往生　皆悉到彼国　自致不退転**」（大経）と。

「**其仏本願力**」というは、弥陀の本願力ともうすなり。「**聞名欲往生**」というは、聞というは、如来のちかいの御なを信ずともうすなり。欲往生というは、安楽浄刹にうまれんとおもえとなり。「**皆悉到彼国**」というは、御ちかいのみなを信じてうまれんとおもう人はみなもれず、かの浄土にいたるともうす御ことなり。

（『真宗聖典』五一三頁）

■参考

（頁はすべて『真宗聖典』）

◆弥陀の本願力

・「本願力」と言うは、大菩薩、法身の中にして常に三昧にましまして、種種の身・種種の神通・種種の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起こるをもってなり。たとえば阿修羅の琴の鼓する者なしといえども、音曲自然なるがごとし。（一九三頁『教行信証』「行巻」『論註』）

◆聞名　／　如来のちかいの御なを信ず

・『経』に「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と曰うなり。「信心」と言うは、すなわち本願力回向の信心なり。

（二四〇頁『教行信証』「信巻」）

・いかんが名づけて「聞不具足」とする。如来の所説は十二部経なり。ただ六部を信じて、未だ六部を信ぜず。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の経を受持すといえども、読誦に能わずして他のために解説するは、利益するところなけん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の経を受け已りて、論議のためのゆえに、勝他のためのゆえに、利養のためのゆえに、諸有のためのゆえに、持読誦説せん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす、とのたまえり。（同『涅槃経』）

・「聞其名号」というは、本願の名号をきくとのたまえるなり。きくというは、本願をききてうたがうこころなきを「聞」というなり。また、きくというは信心をあらわす御のりなり。「信心歓喜　乃至一念」というは、信心は如来の御ちかいをききて、うたがうこころのなきなり。

（五三四頁『一念多念文意』）

◆欲往生　／　安楽浄刹にうまれんとおもえ

・「欲生」と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。すなわち真実の信楽をもって欲生の体とするなり。誠にこれ、大小・凡聖・定散・自力の回向にあらず。かるがゆえに「不回向」と名づくるなり。

（二三二頁『教行信証』「信巻」）

◆かの浄土にいたる

・真心徹到して、苦の娑婆を厭い、楽の無為を欣いて、永く常楽に帰すべし。

（二三五頁　同「序分義」）

私の一冊

（藤原　智）

『清沢満之と宗教哲学
近代日本の学問形成史小景』（法藏館）
箕浦恵了

本書は、真宗大谷派寺院の住職を勤めつつ、大谷大学哲学科の教員として西洋哲学研究に取り組んでおられた箕浦恵了氏の遺作である。

本書は「清沢満之をどこまでも近代日本の宗教哲学の先駆的形成者として考究」するものである。「思想のリアリティー」が、また「同時性」をもって、どれだけわれわれに受けとめられているのか、という疑問を著者は述べるが、そこに「自己に対して問いを失った同朋会運動の現状に関わる問題でもある」と語られる点は、一宗門人として心して聞かねばならないことを思う。

毒杯をあおって死んだ真理の実証者ソクラテスを念頭に置きながら、清沢の学問形成における「頑なな伝統主義」に対する「自由な討究」を、カントの大学論を通し、自律的理性の貫流と確かめる。そのうえで、プラトンに対比させつつ、「自己を知る」ことこそ清沢の学問理念を指し示していることを論じる。ここに清沢は、ソクラテスと歴史的現在としてまみえていたのだと。

末期の膵癌のなかで執筆された著者最後の仕事を、われわれはどう受け止めるのであろうか。

『聖典』の試訳（現代語化）

第十八願の文に続いて取り上げられる「銘文」は、「弥陀の本願力」を語っている。「南無阿弥陀仏」を聞くところに、その願いのはたらきをいただいて阿弥陀の世界に生まれるのだと、この文は言う。

私たちは時として、思うどおりにならない今のこの世界を振り捨てて、まったく別の新しい世界に生まれたい、と考えることがある。目の前の悲しい現実に堪え切れず、ここではないどこか別の場所に生まれ変わりたい、と切に願うことがある。しかし、辛いことも悲しいこともなく自分の思い通りになるような〝世界〟など、本当にあるのだろうか。私たちが受け入れられないのは、本当は「この世界」ではなく「この自分自身」なのではないか。

「安楽」や「極楽」といった言葉が示すように、浄土とは喜びの世界であると言われる。そこに生きるものは、みな喜ぶ。それはつまり、個人的な欲求が満たされているということではなくて、むしろそうした個人性が破られ、そこにお互いの存在をそのままに認める世界が広がっている、ということである。「願いの世界に生まれよ」とは、閉塞したこの身自身を知れ、自己中心的な世界から出でよ、という呼びかけである。

（研究員　内記　洸）

『尊号真像銘文』試訳 ⑥

現代語

「其仏本願力」というのは、阿弥陀如来の願いのはたらきです。その願いのはたらきとは次のようなものである、というのです。

「聞名欲往生」の**「聞」**とは、如来の誓いの**「名」**を「信じる」ことです。ただ漠然と聞くのでも思い思いに聞くのでもなく、「南無阿弥陀仏」として表れた如来の誓いを、そのまま信じることなのです。**「欲往生」**とは、〝真実の世界〟に生まれようと思いなさい」というのです。如来の誓いの名を疑いなく信じるところに、「本当に平等な、喜びに開かれた世界に目覚めよ」という呼びかけを聞くのです。

「皆悉到彼国」とは、如来の誓いである「南無阿弥陀仏」を信じ、その呼びかけのままに阿弥陀の世界に生まれようと思う人は、誰もがみな、もれることなくその世界

親鸞仏教センターの動き

（2013・11～2014・1）―抄出―

■2013年

11・1　第6回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
11・5　第66回（通算・第117回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
11・6　第39回『尊号真像銘文』研究会
11・7　第1回センター会議（親鸞仏教センター）
11・8　親鸞聖人ご命日のつどい
11・13　第134回清沢満之研究会
第135回清沢満之研究会「自己を「証しする（attesten）」ものとしての弥陀の本願―本願はどこにおいて働くのか―」京都大学名誉教授：長谷正當氏（文京区・東京ガーデンパレス）
11・14　第138回英訳『教行信証』研究会
11・29　第9回研究員と読む公開輪読会「呼応する信心―「親鸞聖人御消息集」を読む―」担当：内記洸研究員①11／29②12／6③12／13④12／20（文京区・東京大学仏青会館）
12・3　第7回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
第67回（通算・第118回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
12・4　第40回『尊号真像銘文』研究会
12・11　第45回現代と親鸞の研究会「西洋の近代とH本の近代」哲学者：長谷川宏氏（豊島区・ステーションコンファレンス池袋）
12・13　親鸞聖人ご命日のつどい
12・16　第159回英訳『教行信証』研究会
12・18　第136回清沢満之研究会
12・24　第8回「教行信証」「化身土巻・末巻」研究会
「顕密体制と専修念仏」大阪大学教授：平雅行氏（千代田区・東京国際フォーラム）
12・25　親鸞仏教センター報恩講

■2014年

1・10　親鸞聖人ご命日のつどい
第9回研究員と読む公開輪読会「僧伽（サンガ）の空気―「清沢先生　信仰坐談」を読む―」担当：名和達宣研究員①1／10②1／17③1／24④1／31（文京区・東京大学仏青会館）
1・15　第9回「教行信証」「化身土巻・末巻」研究会
1・16　第68回（通算・第119回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
1・22　第41回『尊号真像銘文』研究会
1・24　第160回英訳『教行信証』研究会
1・29　第137回清沢満之研究会
1・30　第42回『尊号真像銘文』研究会

を信じる人にとって最も大切なことなのだ、というのです。**「不退転」**――「決して退くことがない」――とは、迷いの世界を生きるこの身に、必ず「仏」になるということが証されるのです。いつまでたっても、どこまで行っても迷い苦しむ自分でありながら、そうしたわが身の事実を包みこんで、そのままにこの人生を歩んでいけるのだと、はっきりと定まる。大切なのはこのことなのだと心得なさい、と教えてくれている言葉なのです。

（訳：親鸞仏教センター）

とすべしとおもえとなり。**不退**というは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらいなり。これすなわち正定聚のくらいにいたるをむねとすべしと、ときたまえる御のりなり。（『真宗聖典』五一三頁）

■参考

（頁はすべて『真宗聖典』）

◆おのずから　／　衆生のはからいにらず

・また「自」は、おのずからという。おのずからというは、自然という。自然というは、しからしむという。しからしむというは、行者の、はじめて、ともかくもはからわざるに、過去・今生・未来の一切のつみを転ず。転ずというは、善とかえなすをいうなり。もとめざるに、一切の功徳善根を、仏のちかいを信ずる人にえしむるがゆえに、しからしむという。はじめて、はからわざれば、「自然」というなり。誓願真実の信心をえたるひとは、摂取不捨の御ちかいにおさめとりて、まもらせたまうによりて、行人のはからいにあらず。金剛の信心をうるゆえに、憶念自然なるなり。この信心のおこることも、釈迦の慈父、弥陀の悲母の方便によりて、おこるなり。これ自然の利益なりとしるべしとなり。（五四八頁『唯信鈔文意』）

◆いたる

・すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまえるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毘抜致にいたるとも、阿惟越致にいたるとも、ときたまう。即時入必定ともうすなり。（五三六頁『一念多念文意』）

◆致　／　むねとす

・如来の本願を説きて、経の宗致とす。すなわち、仏の名号をもって、経の体とするなり。（一五二頁『教行信証』「教巻」）

・すべて、よきひと、あしきひと、とうときひと、いやしきひとを、無碍光仏の御ちかいには、きらわず、えらばれず、これをみちびきたまうをさきとし、むねとするなり。真実信心をうれば実報土にうまるとおしえたまえるを、浄土真宗の正意とすとしるべしとなり。（五五二頁『唯信鈔文意』）

◆不退のくらい　／　正定聚のくらい

・また回向発願して生まるる者は、必ず決定真実心の中に回向したまえる願を須いて、得生の想を作せ。この心深く信ぜること、金剛のごとくなるに由って、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。ただこれ決定して一心に捉って、正直に進みて、かの人の語を聞くことを得ざれ。（二三四頁『教行信証』「信巻」「散善義」）

『聖典』の試訳（現代語化）

現代においては「自分」ということがとても重要である。運動能力や知性、感性を磨き、スキルを身に付け、円滑なコミュニケーション能力を育むことによって、ぶれることのない確固たる自分自身を立ち上げる。そのための〝自由〟は保障されているという。だが、それは逆から言えば、このようにに自立した責任主体にならなければ、社会に、他人に認めてもらえないということだ。私たちは、認めてもらえる自分を作り上げなければならない。

しかし、生まれたときのことも知らなければ、死ぬときのこともまったくわからない私たちである。そんな私たちが、どこまで自分自身で立ち上がり、どれだけの責任を引き受けていくことができるだろう。終わりのない「自分が、自分が」というスパイラルに巻き込まれて、そのまま人生を終わっていくだけではないのか。

「おのずから」の本願のはたらきは、我に縛られた私たちのありようを「おのずから」の状態に、おのずから帰す、という。大切なのはこのことなのだ、と親鸞は言う。今ここに、現に生きているということに、すでに存在の意味は与えられている。「南無阿弥陀仏」を聞くところに、存在の意味を聞く。私たちはただ、そこに始まる一歩一歩を歩むのだ、と。

（研究員　内記　洸）

『尊号真像銘文』試訳⑦

現代語

「自致不退転」の**「自」**は、「おのずから」ということです。「おのずから」とは、私たち自身の思いはからいではないということ、つまり如来のはたらきが私たちを導いて、そのままに**「不退転」**という位にいたらしめる、というのです。「自」とはつまり、「自然」という言葉――「おのずから、しからしむ」――なのです。**「致」**とは、「いたる」ということであり、また、「何より大切なこととする」ということです。如来のはたらきは、ああしたいとか、こうしなければならないといった私たち一人ひとりの我を破って、そのまま私たちを「不退転」の位にいたらしめる、というのです。このことこそ、如来の願いを聞き、「南無阿弥陀仏」

原文

「自致不退転」というは、**自**は、おのずからという。おのずからというは、衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり。自然ということばなり。**致**というは、いたるという、むねとすという。如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらいにいたらしむるをむね

清沢満之研究会報告⑭

清沢満之を「一貫する」思想

―『臘扇記』を読む Vol. 1―

親鸞仏教センター研究員　名 和 達 宣

親鸞仏教センターでは、清沢満之の思想の現代的意味を究明することを目的に、設立当初より継続して「清沢満之研究会」を開催している。2013年８月からは『臘扇記』を新たなテキストとして月に一回のペースで考究を進めている。今号では、初回に確認された全体の視座と、2013年11月13日に京都大学名誉教授・大谷大学元教授の長谷正當氏を迎えて開催した研究会の報告を行う。

『臘扇記』第一号（表紙〈左〉・裏表紙）
清澤満之記念館　収蔵

『臘扇記』とはいかなる書物か

清沢満之の『臘扇記』は、第一号と第二号とから成る。第一号は1898（明治31）年８月15日～11月18日の記録であり、第二号は11月19日～1899（明治32）年１月25日の記録と、その後に続けて「偶坐案定」（２月25日付）、「四月五日記」という二つの随想が置かれたものである。「日記」として分類される書物であるが、単なる日常の記録にはとどまらない。宗門改革運動に挫折した清沢が、病の身を抱えて自坊の大浜西方寺へ帰り、その保養中に内観省察した自己の姿をそのまま刻み込んだ「実験」の書でもある。

清沢は、帰省前に「これからは一切改革のことを放棄して、信念の確立に尽力しようと思う」（河野法雲の追憶）と語ったという。それゆえ、「信念の確立」が当面の課題であったと考えられるが、帰省直後に書き出された日記の名は『徒然雑誌』であった。ところが、約三ヵ月の期間を経て、突然、『徒然雑誌　第一号』を終了させ、新たな名のもとに日記を書き始める。それが『臘扇記　第一号』である。

清沢が「第一号」と題して始めた日記を途中で終えるのは他に例を見ない。また、日記に限らず『宗教哲学骸骨』、『他力門哲学骸骨試稿』といった哲学論稿、あるいは『在床懺悔録』、『有限無限録』などの思索ノートに至るまで、書物の名には、その当時の直接的（実存的）な課題が表現されていると見受けられる。したがって、「徒然（手持ち無沙汰、退屈なこと）」ではなく「臘扇」と名づけなければならない逼迫した問題があったということであろう。

「臘扇」とは「十二月（冬）の扇」という意味で、つまるところ「無用者・役立たず」を表す。大浜に帰ってからの清沢は「さしあたり、寺の役に立つことは何もない」（西村見暁『清澤満之先生』〔法藏館〕213頁）という有様だったようで、自らも後に「真実の厄介者」と述懐している。また、注目すべきは、第一号の表紙の題号に添えられた「黙忍堂」という語である（写真参照）。「黙忍」とは、第一号の裏表紙に記された「百戦百勝不如一忍　万言万当不如一黙」という言葉（貝原益軒『続和漢名数大全』からの引用）に基づく名のりであると考えられる。そして、「堂」とは建物のことで、ひいては「生きる場所」を表す。「真実の厄介者」を自覚し、居場所のない生活において、「黙忍を生きる場所とする」という静かなる意志が表されていると読みとれる。それゆえ、『臘扇記』とは、「徒然」なる自己が顧みられたところから、「黙

忍堂臘扇」という名のりのもと、その自覚内容がそのまま「記」された書であり、まさに清沢における「悪戦苦闘のドキュメント」であった。

なお、『徒然雑誌』の最後は「如来トハ何物何在ナルヤ」という問いで締められている。その問いが、自己省察の深化とエピクテタスとの値遇を通して、『臘扇記』では「自己トハ何ゾヤ」へと転回されるに至る。当研究会では、言葉の解釈よりも「なぜその言葉が記されたのか」という必然性を重視する。それゆえ、清沢の肉筆（影印本）にも触れながら日々の記述を読解していくが、それだけに留まらず、その深奥にある課題をも掘り起こすことを目指す。その探求を通して、清沢から「自己トハ何ゾヤ」という問いが発起する瞬間を目の当たりにすることができるであろう。

「一貫する」思想 ― 歴史的邂逅 ―

従来の多くの研究では、晩年に清沢が回想する「エピクテタス氏教訓書を披展するに及びて、頗る得る所あるを覚え」（明治35年「当用日記抄」）という言葉に注目するがあまり、『臘扇記』を通して思想の「転換点」を確かめることに終始された。しかし、当研究会はむしろ、清沢を「一貫する」思想の探求を中心課題とする。そして、ここに二つの意味を込めている。

一つ目は、清沢個人の生涯を「一貫する」思想という意味である。近年の清沢研究の主流は、晩年に携わった「精神主義」運動に着目したもの（山本伸裕『「精神主義」は誰の思想か』2011年、近藤俊太郎『天皇制国家と「精神主義」―清沢満之とその門下』2013年〔共に法藏館〕など）と、思想の基軸を初期の「宗教哲学」で構築された理論に見いだそうとするもの（今村仁司『清沢満之と哲学』2004年〔岩波書店〕など）とに大きく二分される。当研究会では、その二つの流れに目を向けつつも、初期から最晩年にまで「一貫する」ものを、『臘扇記』期間中の思索、特にエピクテタスとの邂逅を通して得たものを確かめながら掘り起こしていく。

二つ目は、清沢という人間を貫き、現代を生きる「この私」にまで至り届いた思想という意味である。特に、その思想形成期に清沢の宗教哲学の影響を多大に受けたと考えられる西田幾多郎（1870～1945）と、真宗教学の伝統において清沢の有限無限論を「法藏菩薩と自己との関係」において探求した曽我量深（1875～1971）の思索に注目することで、その「一貫する」ものを尋ね当てていく。

長谷正當氏を招聘して開催した研究会では、二つ目の視座に基づき「自己を“証しする（attester）もの”としての弥陀の本願―本願はどこにおいて働くのか―」というテーマで講義をいただいた。そこでは、本願の思想が宗派を超えて広く「人間において」展開されるべく、まず清沢の思索に依りながら、「自己を証しする」という問題とのかかわりから確かめられ、次いで、西田幾多郎が晩年に論じた「場所論的把握」、特に「逆対応」という概念に依りながら、その現代的意義と可能性が解き明かされた。

「日記」とは本来、他の読者を前提としない書物であり、どこまでも自己が自己と向き合う姿が投影された個人的な記録である。その個人性が破られ、現代にまで届けられた『臘扇記』を読み解くことで、私たち一人ひとりにおいて、この「一貫する」ものとの歴史的邂逅が起こり得ると考える。　（文責：親鸞仏教センター）

※本報告の詳細（論文）と長谷正當氏の講義は『現代と親鸞』第28号（2014年６月１日号）に掲載予定です。また、報告文中の傍点は担当者が付したものです。

長谷　正當（はせ　しょうとう）京都大学名誉教授
1937年富山県生まれ。1999年京都大学教授を定年退官後、大谷大学教授、客員教授を経て京都大学名誉教授。著書に『象徴と想像力』（創文社）、『欲望の哲学―浄土教世界の思索』、『心に映る無限―空のイマージュ化』、『浄土とは何か―親鸞の思索と土における超越』（以上、法藏館）など多数。また、『現代と親鸞』第17号に「「自己と何ぞや」という問いをめぐって―清沢満之の『無限の因果』から見た二種回向の理解―」が掲載されている。

「長谷氏を招聘しての研究会の様子」（於：東京ガーデンパレス）

鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版の再翻訳の試み

既報（本誌第44号）のとおり、当センターでは鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版の再日本語化を行っている。プロジェクトチームのメンバーがそれぞれ大拙の訳と対峙し、月に一度のペースで開かれている編集会議でそれぞれの意見を交わし、大拙の思想やその表現の歴史的背景などを考慮しながら、親鸞聖人の息吹を新たなかたちで表出させるべく作業を行っている。

ここでその編集中の原稿の一部を紹介する。

◘『教行信証』「総序〈部分〉」原文（『真宗聖典』149頁、東本願寺出版部）

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

■鈴木大拙『英訳 教行信証』改訂版（Oxford University Press）

It is, indeed, a rare event, however many lives one may go through, that one happens to find oneself so happily situated as to be taken up in Amida's Prayer for universal deliverance! To attain to the pure faith of truth, however many numberless kalpas one may live, is, indeed, the most difficult thing. If not for the most favorable karmic combination in one's past lives, how could one ever come to cherish a faith in the Pure Land and live it accordingly?

■今回の試訳（仮）

「すべてのものを遍く救おうというアミダの悲願の中に抱かれていることは、なんと幸せなことだろう！」と図らずも思い至るのは、何度も生まれ変わろうと、ごく希なことなのだ。そして、数えきれないほどのカルパを生き続けたとしても、真実の清らかな《信頼》を得ることもまた至難なのだ。もし過去のいくつもの生において最善の〈行為や経験の積み重ね〉〔カルマ〕に恵まれていなかったら、〈清浄な国土〉への《信頼》を抱くとともに、それを《実践》することができるだろうか？

※なお、当初は2013年６月末の刊行を予定していましたが、編集会議を重ねるごとに翻訳内容が深化し慎重な作業が求められたこと、また、裏づけ資料の収集などに時間を要したため発行時期を延長して取り組んでおります。本年中には刊行する予定ですのでご承知おきください。

出版物のご紹介

◇『愚に帰る―悲しみのままに開かれる世界―』本多雅人

本多雅人氏（当センター元嘱託研究員）の名古屋別院報恩講での講演録です。現代の諸課題に親鸞思想の立場から提言していく内容で、常に問いに立つことの大切さ、教えを聞いて愚に帰っていくことが、人間を本当の意味で開いていくことになると語りかけています。

お問い合わせは、真宗大谷派名古屋別院教化事業部まで
TEL 052-331-9578

◇『親鸞抄』武田定光

武田定光氏（当センター元嘱託研究員）の新著です。めまぐるしく過ぎていく日常において、ふとこの本に立ち止まると、その状況ごとに親鸞聖人の教えが聞き取れる短文集です。日ごろは難解に思う仏教語が、生活のなかで「ことば」となって一人ひとりに昇華されてきます。

お問い合わせは、ぷねうま舎まで
TEL 03-5228-5842

あとがき

「現代と親鸞」をキーワードに活動をしている親鸞仏教センターで、実にさまざまな現代の問題が渦巻いているということを改めて教えていただいている。しかも、その問題は、複雑に絡み合い、解決することが困難なことばかりである。ああなったらよい、こうなったらよい、と思うことは多々ある。しかし、なぜかその反対の方向に進むことが多いようだ。思いどおりにいかないことは理解しているが、賛成、反対の根底にある真実を表現していくことを続けなければならない。（金石）▼小学生のころ、考古学者や天文学者にあこがれた。地面の石ころを眺めては何でも化石にしたし、星座早見盤を片手に頸が痛くなるまで夜空に勝手に星座を描いたりした。それぞれ想像力がかきたてられて、圧倒的な時間と空間が押し寄せてくるような感覚に包まれた覚えがある。ここに至ってノスタルジーに浸るつもりはない。仏法に耳を傾けると、何の変哲もない日常のなかで、それらの圧倒的な時間と空間に匹敵するような「今」を感じることがある。それは哲学すること、科学すること、未踏の地に行くことなど諸先哲の営為を目の当たりにしたときにも感じる。探求心（求道心）の源泉にはノスタルジーに留まることをゆるさないものがあるようだ。しかし、気づけば「UMA」を検索している自分もいるので、これを記して気を引き締めたい。（大江）▼大学時代、「石橋を叩いて渡って生きていこう」と友人と話していた。「うまく」生きるために最善の方途を選択して生きていこうと。そしてそうしてきた、つもり。しかし…である。叩きまくったはずの石橋は必ずしも私の望む場所には架かっていないようだ。どうなっても自分は満足しない。それでもまだ私は石橋を叩くだろう。自分の気が済むまで叩きまくって、あとは歩むしかない。自分が選んだ橋であれば、人に対して言い訳はできない。言い訳がましい私の、せめてもの誠実さか。（鈴木）▼人の話を聞くのは難しい。自分の考えがあるがゆえに、違う考えは受け入れがたく、結果聞きながす。自分の考えこそ正しいのだという思い。その思いにとらわれ、ろくに調べもせず物事を語る。では正しいかどうかは、誰が決める？　少なくとも自分ではないだろう。それよりも他人の言葉にハっとさせられることのほうが圧倒的に多いのではないか。聞く心をもたなければ。そう思いながらも、ふと気づくと「ああそれね」と聞きながしてしまっている自分がいる。（田鶴浦）